



京都
MONO語り

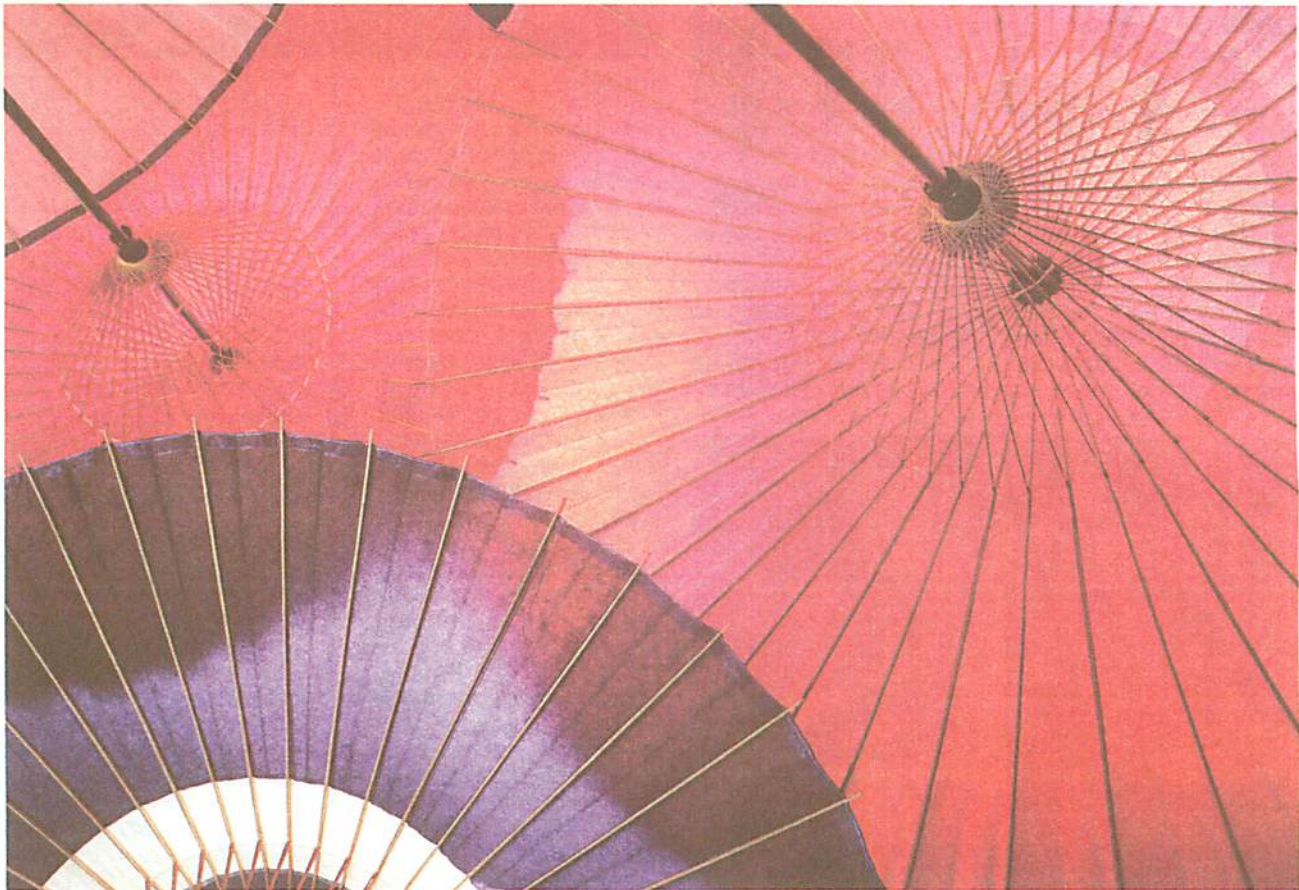
(左から) 一見、小さな和傘に見えたものを開くと…。あらら、おしゃれなランプシェードになった

和傘と光 柔らかな出会い

あまたの伝統工芸が職人の手で受け継がれている京都。庶民の生活必需品として親しまれてきた和傘もその一つ。現在では伝統行事や茶道の道具、広告、ディスプレイとして使われる以

外、出番は減り、老舗も京都には1軒しか残っていない。が、伝統の技を継承しつつ、新しい発想を取り入れた商品作りにも挑戦する動きが出てきた。若い和傘職人たちは元気だ。

ひよしや
日吉屋



SANKEI
EXPRESS
2007.11.26

コレクション
の宝

は「探検大学」と呼ばれてい。探検とは未知の地域を踏とだが、地球上の生物多様性フィールド研究者にとってはりことでもある。現在でも数外学術調査が行われており、総合博物館に収蔵されている物標本類のかなりの部分は、りような「探検」によってもこののである。

とはそんなものではない、見もあろう。たしかに辞書に

探検隊が残した植物標本

よっては「危険を冒して」というニュアンスがある。京都大学の山岳部や探検部などの華々しい「探検」はやはり、そうでなくてはという気がする。だが、そんな探検隊もちゃんと植物標本を残している。写真は1943年、今西錦司を隊長として行われた「大興安嶺探検」で、当時農学部学生だった隊員の吉良龍夫がガン河下流で採集したダフリアカラマツの標本である。

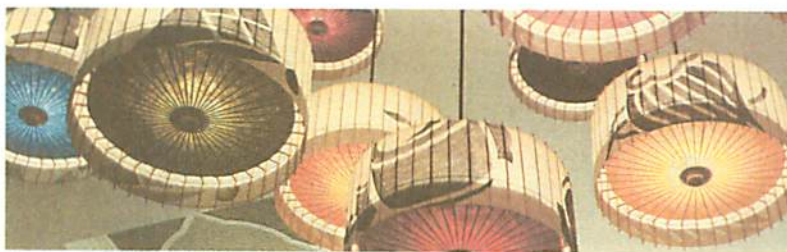
記録によれば、広大な草原地帯を抜けた探検隊はこの日、森林地帯へと足を踏み入れている。最初に目についた

ダフリアカラマツの一枝を標本にしたものだろうか。この探検隊の「植物採集目録」は、吉良により学術調査の部に発表されており、307種が見える。標本自体は農学部園芸学の標本室から理学部を経て、現在は総合博物館の収蔵室に収められている。

探検という言葉にはロマンがあり、それゆえにフィールド研究者になってしまった者は多い。筆者もその例に漏れない。

(京都大学総合博物館准教授
永益英敬)

和傘を応用したランプシェードは、近くオープンするホテルのロビー照明にも採用された ー京都市中京区



日吉屋では番傘や蛇の目傘など各種和傘(左)のほか、和ろうそくなど京都の伝統工芸品も販売されている



匠の技 現代の明かりに変身



大きく開いた竹の骨組みに、ていねいに張られた手漉きの和紙。防水のための油が刷毛を使って塗られていく。シュッシュツという刷毛のテンポ良い音が、工房内に響いた。

江戸時代から和傘を作る京都市上京区のお舗「日吉屋」。5代目当主、西堀耕太郎さん(33)を筆頭に、匠の技は20代の若い職人たちに引き継がれている。

1本の竹筒から1本の傘を作る。竹筒を約50本に割る「骨作り」から作業はスタート。轆轤と呼ばれる木製の部品に骨をつなぎ、しんとする棒を組み合わせ、傘の土台ができていく。和紙を張り、軸を塗って天日で干す。漆や顔料で彩色を施し、やっと完成だ。

「骨の数ほど工程があるといわれています。気が遠くなるでしょう」と西堀さん。和傘の姿の美しさは、こうした手作業の積み重ねによって支えられている。

和傘といっても、多くの種類がある。茶会やディスプレイなどに使われる日よけの大きな野点傘。番傘や蛇の目傘といった雨傘、踊りに使われる小ぶりな舞傘…。それぞれ生活や文化に深くかかわってきた。

しかし、洋服需要の衰退や生活様式の変化にともない、和傘を探すこと自体が難しい現代。全国の和傘職人は続々と店をたたみ、かつて京和傘として栄えた京都でも、今ではここ1軒しか残っていない。

和傘の衰退。日吉屋も例外ではなかった。店をたたむ話が具体化したこともある。

「日吉屋は妻の実家。私は京都出身ではないけれど、素晴らしい伝統の技を終わらせるのは嫌だととっさに思いました」と西堀さん。当時は和歌山県内の公務員だっ

た。和傘はシブくて格好良い…。自身の感性を信じて退職し、技を継ぐ決意をした。「和傘の未来を何とかしたい」。その一心で動き始めた。立ち上げたホームページでも広くアピール。そしてとうとう、あることを思いついた。

「和傘を太陽に向けてさすと、和紙から透ける光が何とも魅力的で…。技術を応用してランプシェードを作れないか。試行錯誤が始まった。

そんなとき出会ったのが、「老舗とモダンの縁結び」のビジネスを展開する島田昭彦さん(43)だ。島田さん自身、着物に手描きする数寄工芸の家に生まれた。匠の技の衰退を肌で感じ、伝統の技術を現代に生かすアイデアマンとして活躍する。

すぐさま東京のインテリアデザイナーと西堀さんの間を取り持った。昨年末、和傘の技を駆使したランプシェードがついに商品化。ふだん使わなくなってしまった和傘が、現代の実用品



に変身した瞬間だった。商品名は「古都里-KOTORI」。和傘と同じく折りたたみができ、シンプルな形。明かりを入れると、和紙から透けた柔らかな光が放たれ、角度によっては竹の骨組みを映して幾何学の影が落ちる。「リビングなど洋風の空間にも合うもの」と考えました」と2人は満足そうに話す。

日本産業デザイン振興会のグッドデザイン賞の特別賞を受賞。照明メーカーとのタイアップのほか、ホテルのロビーなど施設のインテリアにも採用され始めた。来年1月にはバリの世界的なインテリアデザインの展示会に出展予定と、勢いに乗る。

一度は危機に瀕しながらも受け継がれた匠の技は、姿を変えて世界の舞台に挑もうとしている。

文 田野陽子、写真 加藤孝規



店舗2階の工房で、和傘を作る西堀さん。刷毛(はけ)で油を塗るなどの作業は、骨の間隔をそろえるため、傘を全開状態にして行う

日吉屋 京都市中京区 今出川 今出川駅 今出川 同志社大学 今出川

日吉屋 江戸時代後期に京都・五条河原町で創業。その後、百々御所とも呼ばれる宝鏡寺の門前に店を構え、和傘を作り続けてきた。最高級の野点傘をはじめ、番傘、蛇の目傘、舞傘、ディスプレイ和傘などを製作している。予約制で工房見学やミニ和傘作り体験も実施。京都の伝統工芸を盛り上げようと、京真田紐や和ろうそくなども販売している。京都市上京区寺之内通堀川東入百々町546。営業時間は午前10～午後6時。月曜定休。

HP www.wagasa.com

星占いは14面に掲載しています。